

# 行程が旅行期待値に与える影響

梶田 祥之介<sup>1</sup>・田中 一成<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生員 修士 大阪工業大学大学院工学研究科  
(〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5 丁目 16-1, E-mail:m1m22105@oit.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 工博 大阪工業大学  
(〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5 丁目 16-1, E-mail:kazunari.tanaka@oit.ac.jp)

旅行に対して抱く期待は、様々な要因から影響を受けている。本研究では、余暇時間における訪問先での活動だけではなく、距離、時間、交通といった目的地までの行程に着目した。旅行行程における期待値を記述することで、観光地の差異を統計的に明らかにし、最終的にはGISを用いて行程にもとづいた地域の現状を定量化することを目的としている。研究方法として、旅行期待値と居住地から観光地への距離の関係、同様に交通利便性との関係の二つの項目についてアンケートにより調査をおこなった。この結果、距離と交通利便性と旅行期待値との関係を明らかにし、結果をGISを用いて定量化をおこなうことで地域全体の期待値の構造をみいだした。

**キーワード:** 旅行, 期待値, 認知距離, 定量化

## 1. はじめに

われわれが抱く旅行に対する期待は、様々な情報にもとづいている。これらの情報は、目的地だけでなく移動手段や休憩所、近隣の施設や名産品など多岐にわたる。観光スポットでの体験や交流といった訪問先での活動を対象とした研究は多いものの、観光地までの距離や時間、またそこにかかる費用といった目的地までの行程に着目した研究は少ない。

しかし、旅行においてその計画や実施後の印象に距離や時間は強く関係してくるものである。例えば訪問地を選定する際に、訪問地への到着までに時間がかかり過ぎるためそこは訪れない、といった事例や、居住地近辺に存在するためいつでも訪れられると考え、ついぞ行かない、といった事例は多く耳にする。これらの事例を調査し定量化していくことで、距離や時間を加味した観光地の評価や、距離や時間に大きく影響を与える交通分野の新たな側面での評価が可能になると考えられる。

## 2. 研究目的

本研究では観光アクセス面における非日常性について、旅行の行程における期待値を記述することで観光地の差異を統計的に明らかにし、最終的にはGISを用い

て行程にもとづいた地域の現状を定量化をおこなうことを目的とする。

## 3. 研究方法

本研究では、観光地を選定するにあたり距離や交通がどのように影響しているかを調査した。

調査では、近畿圏内に存在する観光地を対象にアンケート調査をおこない、各観光地の評価と距離や交通との関係を調べた。

分析では、アンケートによる各観光地の評価の中でも認知距離に着目し、どのような要因が認知距離に影響を及ぼしているかを考察した。

### (1)調査

アンケート調査は、予備調査と本調査の2種類をおこない、近畿圏内に存在する観光地の評価と距離や交通との関係について調べた。

まず予備調査として、今まで訪問したことのある観光地について調査をおこなった。結果として最も頻度が高い観光地は居住地近辺のものであり、次に訪問経験の多い場所は鉄道や高速道路が近くに存在する場所であることがわかった(図-1)。丸が大きく色が濃いほど、訪問頻度が高い場所を示している。ここから、実際に訪れる場所とは、距離や時間があまりかからない場所であると推

定できる。またそれぞれの観光地について、同程度の距離、交通利便の場合、認知度や人気度の高い観光地に対して訪問していると考えられた。したがって実際に訪問する観光地とは、距離や時間が強く関係していることが読み取れ、その中でも観光地の魅力が高いものが選択されていることがわかる。

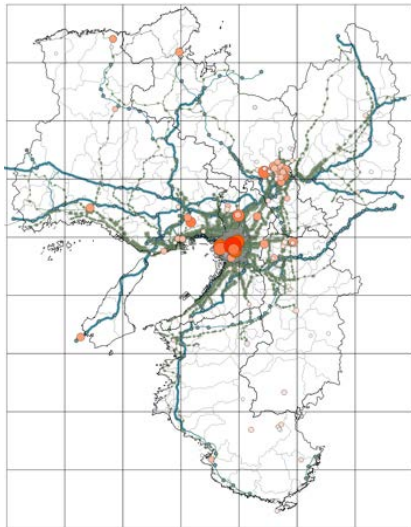


図-1 予備調査アンケート結果

本調査では各観光地に対する評価、訪問頻度、その観光地までの認知距離を抽出することで、各観光地の評価における距離や交通の関連性を調べた。各項目はそれぞれ5段階評価を用いた。観光地の選定では、一定の距離間隔を保つような観光地を選定した。

結果の一例として、認知距離と期待値の和を示す(図-2)。認知距離が遠く期待値が高いほど、丸が大きくなり色が濃くなっている。この値は観光地は居住地から遠いほど魅力的であると仮定した際の観光地魅力度であり、交通利便性の低い場所に魅力的な観光地が多く存在していることがわかる。

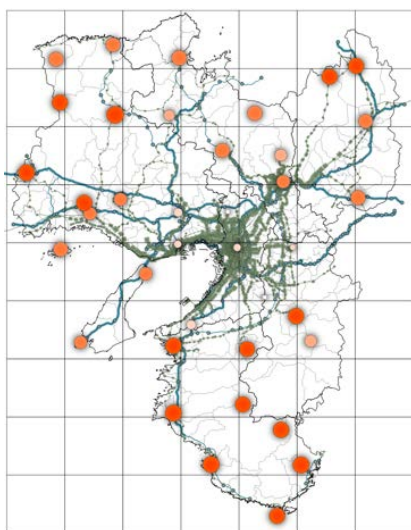


図-2 本調査アンケート結果

## (2)分析

分析ではアンケート調査での回答をもとに、認知距離に影響を与えると考えられる事象を考察した。ここでは認知距離を横軸、実距離を縦軸としたグラフを作成し、その中で外れ値となる観光地に注目して分析をおこなった(図-3)。

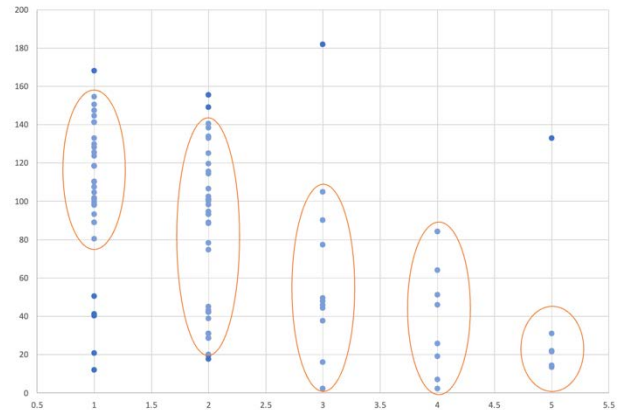


図-3 実距離と認知距離の関係

それぞれの認知距離の結果のうち、平均から標準偏差の3倍となる値までを楕円で囲っている。この外側に存在する観光地は一部の被験者から実距離との間に大きな乖離を持たれていることから、どのような要因がその乖離に関連しているかを分析した。ここから、交通の不便な場所や、期待度と頻度の評価が共に低い場所は、実距離に対して遠く感じられやすい傾向があり、期待度と頻度の評価が共に高い場所は、実距離に対して近く感じられやすい傾向があることが考察された。

## 5. おわりに

本研究では、観光地に対して抱く認知距離の差異を明らかにし分析することで、どのような要因が認知距離に影響するかを調査した。今後はここで考察された要因に対して検証をおこなうことで、行程にもとづく地域間の差異を明らかにする。

## 参考文献

- 1) 鎌田裕美 (2006) 「交通アクセスを考慮した観光地の魅力度評価」, p.149-158, 日本交通学会第65回
- 2) 田中雅大 (2013) 「日常的移動行動との関連でみた都市空間における認知距離の質的側面-金沢市の大学生の事例」, p.47-62, 人文地理第65巻第1号
- 3) 鈴木秀雄 (2004) 「余暇の機能」, p.135-146 人間環境学会『紀要』創刊
- 4) 朝日新聞出版 (2019) 「今、行きたい! 日本の絶景大辞典1000」, p.278-336, 朝日新聞出版